
大根麻呂平安日記

伊能元帥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大根麻呂平安日記

【Nコード】

N7119I

【作者名】

伊能元帥

【あらすじ】

今を遡る事1000年の昔、倭国が藤原氏の支配下に置かれていた頃、

京都の平安京に国の重役を務める大臣がいた。

その名は大根麻呂という。

この男、重役を務める割には怠け者。

しかし、彼が織り成す仕事の質はとても高く評価されている。

我々と変わらない気持ちで、「嫌だ」「眠い」「疲れた」と嘆きな

がらも、

大根麻呂は国を動かす力を持っているのだろうか？

大根麻呂から話があるようです

お。皆さんこんにちは。お元気？

俺、この小説の主人公の大根麻呂。

何かやたらとやる気が無くてさ、俺。でもしょうがなく仕事やっていると褒めてもらえるんだよね。

ちなみに俺の地位、納言長官っていうの。大納言の更に上をいく職務だぜ（キリッ）

俺の友達には国中で有名な陰陽師もいれば、絶世の美女もいる。帝とも仲が良いし、藤原氏の知恵袋

とも呼ばれているんだ！・・・馬鹿でも。馬鹿でもこれだけできるんだって事を知って欲しい！

という訳で俺はこれから平安京での出来事を書いていこうと思う。

まあ、それで腹筋崩壊しても知らんぞ！

春は曙、しかし起きられず

・・・目が覚めた。ぜってえ起きねえ。今日という今日は絶対休む！
明け方、外の景色は綺麗だろうが起きる気がしねえ。

「大臣つてガチで大変なんだよね。一晩で書類200枚とか死ねる」
平安京、藤原氏の屋敷・・・宮廷ではもう儀式や仕事が始まっているようだ。

「おい大根」

「うるせえな、今日は俺は起きないんだよ！」

こいつは俺の友達のみこと。遣唐使が廃止されてからニート状態なのだ。

「一緒に暇潰そうぜ」

「暇つぶしかあ・・・」

書類は昨日全部書き終わった。

「よし、なんかやろうぞ」

「じゃあ日田呉羅でもやろうぜ」

ひたごらとは平安京で流行っている遊び。何かで道を作り、その上に球を置き、転がしていく。最後は

「ヒタゴラ」の旗で決まり。

どうかで聞いたことある？・・・気のせい。そうさ気のせいさ！！

遊ぼうと思った2秒後、帝からの使い・・・それが頭をよぎった。
しまった・・・唐からの食材を貰ってくるの忘れた！！

「みこと！俺はちょっと大輪田泊おおわたのどまりに行ってくる」

「え！？ちょ、待・・・」

大輪田泊とは平安時代、貿易の要であった瀬戸内海に面する都市である。

「うーむ・・・大根麻呂殿は？」

「まだ来てませんが・・・遅いですな」

「美味しい美味しい、新鮮な唐の魚だから・・・はやくしないと」

「うおおおおおおおおおおおおおい」

馬車を飛ばして来た大根麻呂が現われたのだ！

「間に合った・・・唐の食材は？」

「は、唐の王はこの野菜と魚を託しました。」

「良かった・・・これで帝に怒られなくて済む」

大根麻呂は馬車を飛ばして都に帰っていった。

宮廷は神聖な場所

ひたごらやるつもりだったのに・・・もう寝るしかないなこれは常識的に考えて

常識的〓自分の勝手な考え

「帝の君臨なり。宮廷の者は直ちに儀式場へ集まられたり。」
帝とか面倒くせえ。友達感覚だったのに。帝になってから敬語だし・

帝、藤原氏、姫、右大臣、左大臣、そして俺、陰陽師長官。国家のトップが集まって儀式を行う。

ミコトが太い柱の横から覗いている。嫌な奴だ・・・弓で撃たれても知らんぞ？

儀式は神聖・・・とは言っても俺の友達がほとんどだ。

陰陽師長官は俺の親友だし、姫は女友達、右大臣とはよく旅行に行くし、左大臣と酒を交わす。

帝とも夜に会って、敬語を使わないで会話することもある。

藤原氏にも気に入られてるしね。宮廷は俺にとって最高の場所だ。

唐を倒した人がいるらしい

さてと、今俺は滅茶苦茶驚いているんだよね。

儀式も終つてさ、部屋で本読んでたんだよ。

まあ、よくある事だろ？

今日本は藤原氏のもと、朝鮮もそうだが唐とも貿易している。

唐は今の中国で、領土も広くて軍隊も強く、首都の長安にはそれはそれはたくさんの人が来る。

唐は世界帝国と呼ばれていて、俺は今まで最強だと思ってた。無敵の大唐帝国。

それがだ。その唐が西方への遠征をした事がこの本に書いてある。俺は大成功、と思ってページをめくった。すると・・・

「唐が敗れた戦い。以後、唐は西方への遠征には消極的になった」とあった。そもう吃驚した。今で言えばアメリカがカナダに遠征して負けた、みたいな衝撃を受けた。・・・分かりにくいが。

唐を撃退したのはなにやらいすら・・・イスラームとやらの宗教を信仰するアッバー・・・

あっぱーす・・・「アッバース朝」という王朝らしい。イスラーム帝国で、唐よりも

領土が広く・・・

領土が広い？あの広い唐の領土よりも広い？いや、それよりもそんなに世界つてのは・・・

広かったのか・・・

「おい、その大臣」

「はい、なんでしょうか？」

「藤原氏に伝えてくれ、『世界は恐ろしく広い。日本など統一する前に、世界を学ぼう』って」

「は、はあ・・・」

今は亡き聖徳太子様

聖徳太子様。

ああ・・・貴方が生きておられれば。

神にも劣らぬその知識と権威で、私を助けてくださるはずなのに・・・

いや、俺だってね。尊敬してやまない聖徳太子様にすがりたくなることだってあるのよ。

悩みが何かって？

そりゃあね・・・

こここのところ、読書の時間が減ったのよ。

俺の大好きな古事記読んで、思いをはせながら酒を飲むのが楽しみなのに、

おつとめがいそがしすぎて読む時間がないの。

帝さんよ・・・帝さんよ・・・

たまにはおつとめ、休みなさいよホント・・・

いやマジでさ。月に休みが二日って何よ。

平安京ですよ？平らで安心な平安京で、なしてそこまで忙しく働かなきゃならないんじゃない！！

余は納得できへんで！！覚えたての関西弁で論破してやろうかワレ！！

まあ、こんなことを言っているうちに日が暮れて・・・

そろそろ晩飯かな？今日は赤飯かな・・・サバかな・・・

・・・わかんないだろうけどさ、宮廷の食事って毎日がおせち料理みたいなもんなの。

分かるかな、おせち。見た目はいいけど食べる気にならないっていう、あの感じ。

元旦からまだ二日なのに肉料理に手がのびるみたいな。

あの感じ。あれ毎日だよ？「食事も儀式」とかいつて見た目だけの超絶不健康料理を毎朝、毎晩。

でしかも、この前ソーリ肉料理食べたの。辛くなって。そしたら帝さんに見つかっちゃって、なんと減給。

いやはや・・・

デメエ！！帝だからって黙ってりゃあ減給なぞしおって！！

肉料理ツ！肉！タンパク源！！五大栄養素の一つを摂取しただけツ！！

毎日同じ料理ばっか出しゃがるから飽きて肉料理に手を出したのに・・・

たまにはレパートリー変えてみるってんだ。

って、友人が厨房にいるから言ってみたの。

果たして、今晚、その成果が出るのか。

ツシャアアアアイ！！鶏肉！鶏肉の揚げ物ツ！揚げ物を美しく
アレンジしてあるっ！

これは見た目が素晴らしい。タレのおかげで光沢がすごい。
しかもまわりの野菜とマッチしている。栄養満点。

そうだよ。これだよ。味と見た目と栄養バランス。この三つを俺は
求めてたんだな。

さてと、白米と一緒にいただきますしうか。

左大臣と愚痴酒 その壺

鶏肉料理めっちゃ美味かった・・・さてと、今度は食後の読書だ。

食後はほんのり眠いから、考え事にふけるとまあ心地いいこと限りなし！

いいよね、こういう・・・君たちの世代でいうファンタジーっていうかな。

現実じゃないけど、たまにはこういうことに思いを馳せるっていうのも大事じゃないかな。

こつちでいうと光源氏とかね。もう古文だけど、俺たちにとっちゃあ感動的なんだぜ？

モテモテだよモテモテ。磁石のように女が寄ってくるっていう。いいなあ・・・

読書の時間も終わって、いつもなら寝てしまふ時間だが、今日は左大臣と酒を飲み交わす

約束をしているのだ。どうだ、凄いだろう。え？凄さが分からない？うーんと・・・そうだな。国会でいうと、官房長官と酒を飲むみたいな。

約束の縁側に到着。美しい庭。兵士がしっかり警備しているので刀無しでのんびりいけるぜ。

「お、大根。もう来てたのか」

左大臣キタコレ。左大臣の本名は海淵。かいえんという。

つまみはちゃんと持ってきたか？

「あたりめえだろ、ほれ、漬物」

この前公務を忘れて大阪の居酒屋でパアツとやってたくせに・・・

「俺は晩酌には余念がねえんだ。ええか？」

まあいいや。明日休みだしな。

「なんか最近さあ・・・帝が滅茶苦茶元気なんだよ」

帝さんが？特に体調不良とか無いだろ？

「いや・・・元気っていうのはさ、その」

ああ・・・アツチの方ね。新しい正室がきたんだっけ？

「正直さ、うらやましいぐらいの美人なんだよ。普通に美しいっていうレベルを超越している」

分かるわ・・・一目見たけど、あれはヤバイ。狙われる確立大だわ。

「帝っていいよな・・・国のトップで、正室いて・・・」

でも公務とか色々大変らしいぜ？もし武士が台頭したら、追い払われるかもしれんし。

「最近はず平家とかいう奴が強いんだっけ？よく雇われて」

でも、武士だったらモテモテなんだろうな・・・キヤー、強い！・・・みたいな。

「だよなあ・・・うらやましい・・・」

二人の愚痴の続きは、次回で！

左大臣と愚痴酒 その式 と、変動

いやー・・・しかし酒が美味いね。

「今日は俺のお気に入り・・・（ゴソゴソ）・・・この米酒、いっつちやおうか」

あ！これ神戸に本店をかまえるという、幕州酒造の？

「そう！幕州の名酒、菊前酒だ！高かったぞこれ・・・何せお取り寄せだから」

お取り寄せ？いくらしたんだ？

「俺の今月の金、半分はつき込んだ！」

はあっ！？勿体ねええ！そんだけあつたら俺の小説買う金に使わせよ！源氏草子読みたい！

「小説なんて・・・（ゴクツ）、酒に比べれば所詮、タダの紙よ！」
なんだとコラッ！ただの紙が人を感動させるからこそその小説だろ！バリッ（つまみを食べる）！

「まあとにかく、今は菊前の美味さつてもんを・・・」

ドタドタドタッ！

「左大臣様！左大臣様！申し上げます。今日の昼ごろですが、紀伊国の海岸に見たことも無いような言葉を話す人々が上陸したようです！」

「何？じゃあ、その人々は？」

「今しがた、その大部屋に到着いたしました。
身振り手振りで会話したところ、どうやら遠い遠い南方から命からがら逃げてきたようです。」

どうも、外敵が来たとか？」

「なるほど・・・なら急がねば」

「左大臣様！また何かあれば、すぐにご報告いたします。」

大根麻呂様もご同行ください！」

お、分かった・・・

左大臣の後を追ひ、大部屋に到着すると、たくさんの役人と肌の黒い、涼しげで豪華な格好をした人々が数十人ほどいた。

何か覚えがある。

「南方研究書」に載っていた、ジャワの国の人々だ。

しかし、果てしなく離れているジャワの国の人々がここまで来るとは、どういう事だろうか。

大根麻呂は悟った。この人々は日本に救いを求めている。

何か強大な敵が、東進を続け、日本にも迫っている。とすると、次は・・・

「左大臣様！朝鮮の国から、至急の使いが参りました！」

「何？朝鮮からも・・・？」

世界が、日本が動こうとしているのではないか・・・大根麻呂は時代の動きを感じたような、

大いなる思考をめぐらせているのであった。

左大臣と愚痴酒 その式 と、変動（後書き）

いきなり急展開です。大根麻呂の本領発揮はまだまだです。

騒動の翌朝

ああ・・・ねみいよぉ・・・

朝鮮の使いから「今度から貿易を活発にしましょう」という趣旨の話を聞いたんだが。

俺はさ、ジャワの人々を襲った敵が朝鮮にまで侵攻してきたかと思っ
って、

長い儀式に参列してたら、序盤に早速腹痛に襲われたような危機感
をもって臨んでたもんだから、

安心してその場で倒れこんで眠っちゃったらしいんだよね。

どうだ！どうだおい。

安心しただけで倒れこむという熱心ぶり！今まで俺を眠い遊びたい
と嘆いているただの

ダメ男だと思ってた奴ら！見直したかおい！

何？それだけで判断するのは木を見て森を見ない考え方？

大体それも眠かったただけだろ、だって？

アンタ・・・

どんだけ俺の心を見透かしてんだよ！いつからそんなに分かるようになったんじゃないワレ！！

さて、それはさておき来月には平安京でお祭りがあるのだ。
その予定を決めるため、大根麻呂は会議室へと向かった。

会議室には、天皇、左大臣、右大臣と、宮内省総監、兵部省総監、
近衛大将、近衛少将。
その横に中納言、少納言がいた。

天皇が声をかけた。

「大根麻呂。近衛少将の横に座りなさい」

はい。

左大臣が口を開いた。

「では、これより平安京の祭式の予定を決めたる会議をはじめます。
まず、一礼」

左大臣は頭をあげ、落ち着いた表情で言った。

「帝の原案では、各地から地方の食材を集め、市場を特別に広くし

て売ること。

提灯を御内裏から平安京中に吊るすこと。

御所をきらびやかに飾りつけること。この三つがあげられましたが、いかがかな？」

中納言が高い声でゆつくりと言った。

「ええ、どれも素晴らしい案でございます」

左大臣が言った。

「それでは、この案に決定いたします。

・・・この会議は、原案を通すか通さないかのみのもので、実に短いですが、

今回は終了とします。次回は具体的な準備について、もう少し人数でゆつくりと

議論する予定です。では、解散してください」

短く終わって良かった・・・足すぐしびれちゃうんだよね・・・

祭りの計画

平安京で開催される祭りについて計画を立てる為に、

平安京の大商人である甲斐左京と相談をしていた大根麻呂。

甲斐左京は大根麻呂の幼馴染で、高利貸・貿易で大繁盛しているグループの長なのである。

平安京のイメージキャラクターどうしようかね？

「そうだねえ・・・アンキヨウなんてどうだ？見た目はアンコウ」
いいねそれ。アンキヨウにしようかな。

「後はお土産だけど・・・『平安京に行ってきました』っていう名前の煎餅を出そうか」

いいねいいね。一目見れば分かるからね。

「全国から集まるから、色々売り出した方がにぎやかになるし、儲けも出るんだよね。」

だから市場を拡大して、一般の人も出店できるようにしよう。

それから期間限定で税を撤廃して輸入品も売っちゃおうか」

大もうけできそうだね・・・市場は何時にしめる？

「もう、夜中も朝もずっと開催できるようにしよう」

24時間営業の免税市場ともなれば、大盛況の大もうけが予想される。

そうなりや俺の給料もあがるってもんだねえ・・・ヘッヘッヘエ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7119i/>

大根麻呂平安日記

2011年4月17日08時21分発行